

施設見学実習の学内実施を経験した学生の意識の変容

高妻 瑠弥乃

Student perceptions of the on-campus training experience as an alternative to the facility visit training

Rumino KOUZUMA

1. 研究の背景と目的

保育士資格取得のための保育実習は、厚生労働省の定める『保育実習実施基準』によると、習得した教科全体の知識、技能を基礎とし、これらを総合的に実践する応用能力を養うため、児童に対する理解を通じて保育の理論と実践の関係について習熟させることを目的としている。

M 県にある保育士養成を行う M 短期大学では、保育実習の目的を達成するための準備のひとつとして、1 年次の 6 月に、保育所と福祉施設においてそれぞれ見学実習を 1 日ずつ行うが、そのうち施設見学実習の目的は、M 短期大学の『実習の手引き』によると「施設保育士としての職務を知ることで、保育士としての学びの視野を広げる」、「福祉施設の現状を理解し、夏季休業期間以降の体験実習・ボランティア活動に繋げる」としている。また、見学実習での交流や観察を通して施設の現状理解を進めるとともに、2 年次の保育実習 I b（以下、施設実習）に向けた意欲を高めることを、見学実習内容として記載している。

2020 年から続く新型コロナウイルス感染症は、M 県内でもいまだ終息とは言えないなか、M 短期大学における保育士資格取得に係る実習において、特に感染リスクの高い福祉施設における実習は、昨年度の施設実習の学内実施に引き続き、見学実習についても学内での実施を余儀なくされた。この背景には、コロナ禍において保育士養成校在学中の学生の修学等に不利益が生じることがないように、厚生労働省子ども家庭局保育課より実習等の弾力的な運用をするよう周知がなされたことがあげられる。この周知によると、養成施設において新型コロナウイルス感染症の対応等により、実習中止、休講等の影響を受けた学生と影響を受けていない学生の間、修学の差が生じることがないように配慮することとし、実習施設の代替が困難である場合は、実習に代えて演習又は学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を修得することとして差し支えないこととしている。また、実習等に関する他分野の国家資格の各学校養成所等での実践事例等を参考に、保育士養成校においても弾力的に運用し対応することとしている。以下がその実践事例である。

- ① オンラインによる模擬実習（カンファランス、ミニ講義、ビデオ供覧と解説、試問、レポート提出）。

- ② オンラインによる観察・記録等の養成を目的とする授業。
- ③ 学内で事例検討や動画視聴。
- ④ 実習の予習ノートを用いた **e-Learning** による在宅学習（各実習の指導教員がメールでの質問へ回答）。
- ⑤ 実習先講師を招聘し、実習先での状況や実習を行った時の対応など、通常より現場に近い授業演習を実施。
- ⑥ 臨地（病室、在宅、居室）と大学をオンライン接続し、以下の内容の学内実習を行う。
 - ・臨床実習への協力の同意を得た患者にオンラインで聴取する。
 - ・指導教員が収集した患者の日々の様子の映像情報を用いて、計画を策定する。
 - ・リアルタイムの患者の状況を確認・評価しながら、日々の計画を策定する。
 - ・学生が役割分担するなどにより、学内でのロールプレイを通じて技術を修得する。

これらの項目に従い、M 短期大学の施設見学実習についても、代替実習施設の確保が困難であることから学内実習へ切り替えることとなった。その内容についてであるが、学内実習は1日4コマで構成し、2コマ分を2年次に実施する施設実習の該当実習先の実習学生の指導担当職員を招聘し外部講師による講話とした。講話では、施設の役割、機能、保育士の職務、実習中の留意事項、求められる人材としての施設保育士の姿等の説明、学内見学実習で学ぶポイントの明確化を行った。また、可能な限り、施設内の様子や、他職員のインタビュー、施設利用者のプライバシーを確保した上での支援の様子等を動画等で視聴し、施設保育士のイメージを具体化できるよう構成した。残りの2コマ分は施設実習担当教員による講義で、グループワーク中心の授業内容とし、学外での見学実習のためにあらかじめ担当していた施設ごとのグループに分かれ、本来自分が行く予定であった施設について、制度上の位置付けと役割、利用者像と利用目的、その施設に勤務する保育士の勤務内容などを、過年度の施設実習に係る実習指導等の授業内で学生が作成した資料や、施設のホームページ及びパンフレットを用いて調べ考察した。また、学内実習振り返りシートへの記入及び疑問点の提起、グループワークの発表のための原稿作成を行った。グループワークの発表では、担当施設種別の異なる学生で小グループを編成し、担当先別の調べ学習から得た情報をワールドカフェ方式で発表し、他の種別の施設情報を得て意見交換、保育士の職務の幅広さと各施設種別の理解を進めるとともに、2年次に実施する施設実習及びその希望種別選定に向けた見通しを具体化できるようにした。このグループワークの発表については、M 短期大学実習指導課による「令和4年度実習計画（1年生）前期」において、相互発表にて様々な福祉施設を知り、それをもとに施設実習の配属先希望施設を決める旨が記されている。

このほか、事前指導として、学内実習の心構えや留意事項、記録の取り方等の説明や、児童福祉施設を取り巻く法制度のありかた及び現状について説明を行い、学内実習当日に向けて招聘した外部講師が勤務する施設をはじめとして、施設保育士が勤務する現場を理解できるような授業を行った。また、事後指導として、学内実習当日のグループワークの発表で議論された質疑応答などを踏まえた施設に関する資料の作成と、web アンケート形式で2年次の施設実習について配属先希望調査を行った。

このように、見学実習先職員を講師として招聘し、実習先の状況や実習の際にどのような視点で見学するのか等、現場での見学実習に近い授業内容とし、学内実施ではあるが視覚教材を豊富に活用して実際の施設の様子が分かりやすい授業内容とした。

そこで本研究の目的は、実際の現場に出向いての見学実習ではなく、学内での見学実習となった

1 年次学生の学修成果について、意識調査による実施後の意識変容を把握することで、2 年次の施設実習に向けて、実習目的を達成するために今後、実習指導教育においてどのような学習支援を必要とするか検討することである。

2. 方法

(1) 対象者及び調査方法

調査は M 県内の短期大学保育科のうち保育士資格取得を目指す 1 年次学生を対象に、Universal Passport を用いたウェブアンケートを行った。調査票には、本調査の主旨、方法、個人情報の保護、本調査で得られた情報の目的以外の使用はしないこと、協力は自己の自由意志によって決定されること、協力の途中離脱が可能であること、同意の有無による不利益や回答内容による不利益を受けないこと、調査に協力した場合の権利保護を記載した。

調査は 2022 年 6 月 22 日から 6 月 30 日までの間実施し、回収された各アンケートのすべてに回答が得られたものを有効回答とした。その結果、対象数は 147 名、有効回答率は 96.1%であった。

本研究は、宮崎学園短期大学の人を対象とする研究に関する倫理審査会に申請し、承認されている（承認番号 2022002）。

(2) 調査内容

調査内容は、施設見学学内実習を経験して、回答者自身の取り組みについて 2 項目、2 年次に実施する施設実習を見据えて回答者自身の意識がどのように変容したかについて 11 項目、施設見学学内実習の構成について 2 項目とした。

①施設見学学内実習への取り組みについて（2 項目）

施設見学学内実習 1・2 時間目の外部講師による授業について、実際に施設を見学したかのような学びが得られたかを、5 段階で評価し、回答者自身の学内実習への取り組みについて、を 4 段階で評価した。

②施設見学学内実習の経験による、回答者の施設実習への意識の変容（11 項目）

2 年次に実施される施設実習について、回答者自身が感じている不安を 9 の選択肢から複数回答と自由記述で評価した。

本来実施される予定であった施設見学実習先における利用者種別や支援のありかたについての理解度を 4 段階で評価した。

施設見学学内実習を経験したことによる施設実習への意識の変容を、意欲の変容について、施設実習への不安感の変容について、福祉施設や施設保育士についての知識習得度について、施設保育士の業務への関心について、それぞれ 4 段階で評価した。

また、施設実習の施設選択について施設見学学内実習を経験したことで、参考になったか、選択を希望する施設は絞り込めたか、選択したいと感じる施設があったか、施設選択を考える機会となり得たか、施設選択を考える時間として十分であったかを、それぞれ 4 段階で評価した。

施設見学学内実習実施 2 日後の授業内に、施設実習の実習先希望調査を実施したが、実際に施設での見学実習ではなく学内実習であっても施設の選択をすることができたかを 4 段階で評価した。

③施設見学学内実習の構成について（2 項目）

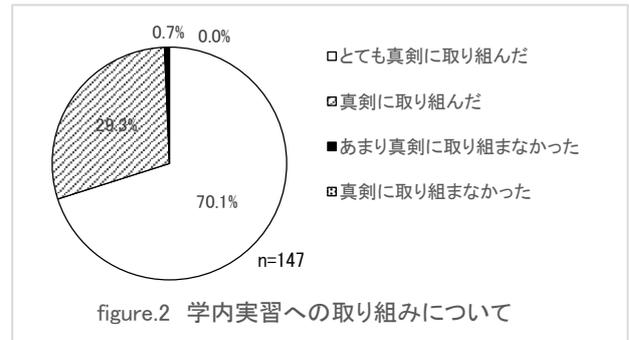
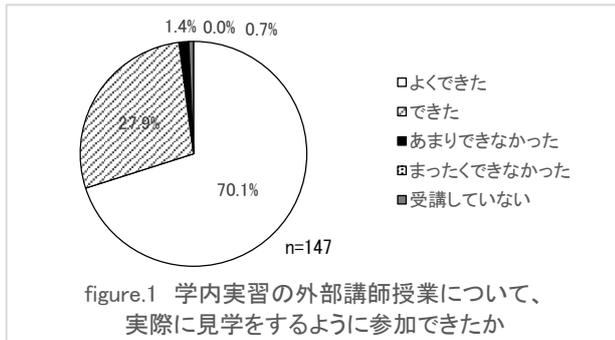
施設見学学内実習の準備段階から全体を通して感じたことを 8 の選択肢と自由記述で評価し、

その他施設見学学内実習に関する意見を自由記述で評価した。

3. 結果

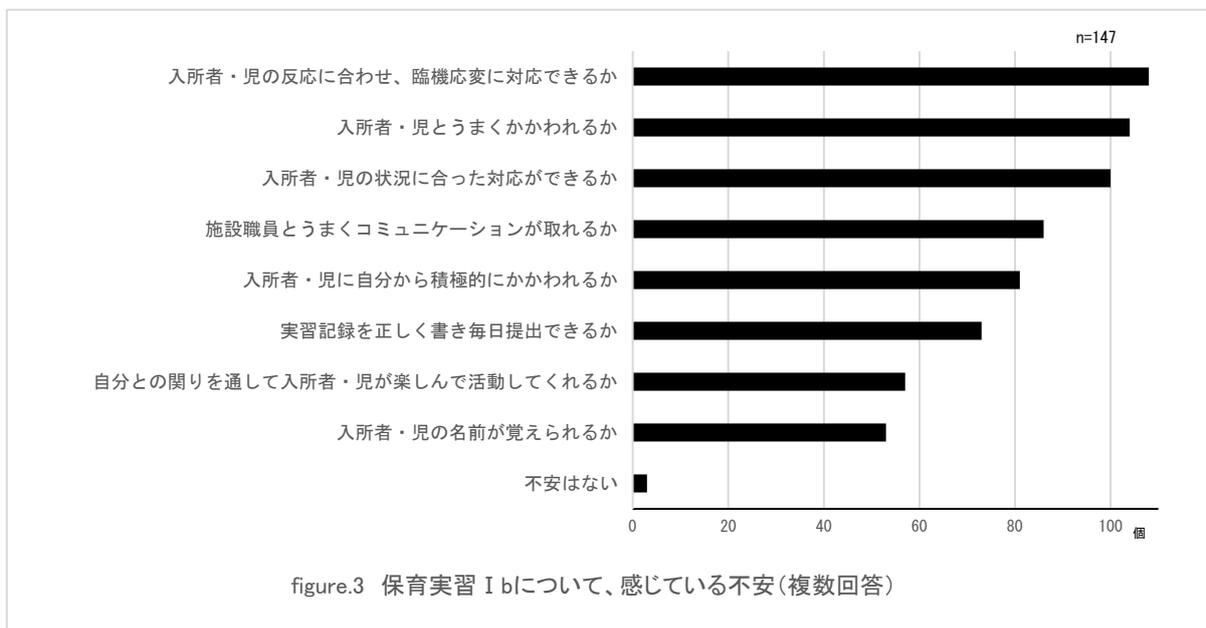
(1) 施設見学学内実習への取り組みについて

学内実習 4 コマのうち 2 コマ分を、障がい者支援施設と障がい児通所支援施設の職員を講師として招き、ZOOM を用いた講話として実施した。講話では可能な限り施設内の様子や、他職員の様子、支援の様子等について動画を用いた説明がなされた。その講話を受講してみて回答者自身が「学内実習の外部講師授業について、実際に見学をするように参加できたか」について、「よくできた」と回答した学生が最も多く 103 名 (70.1%)、「できた」41 名 (27.9%)、「あまりできなかった」2 名 (1.4%)、講話を実施した 1、2 限目を遅刻して「受講していない」回答者が 1 名 (0.7%) であった (figure.1)。「学内実習への取り組み」について、「とても真剣に取り組んだ」が 103 名 (70.1%)、「真剣に取り組んだ」43 名 (29.3%)、「あまり真剣に取り組まなかった」1 名 (0.7%) であった (figure.2)。



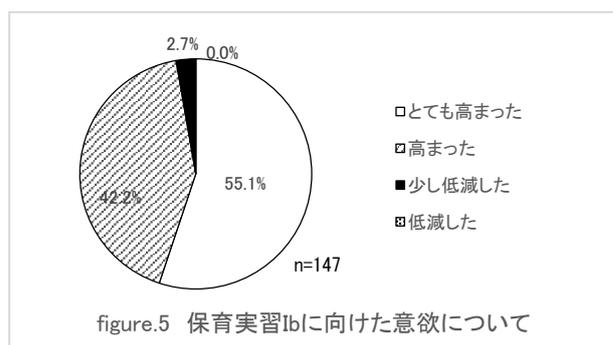
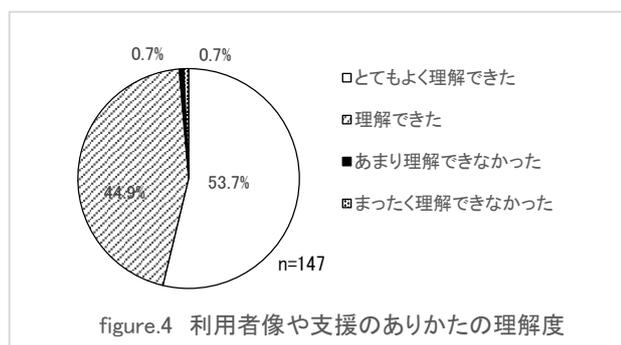
(2) 施設見学学内実習の経験による、回答者の施設実習への意識の変容

2 年次に実施する「施設実習について、感じている不安」について 9 の選択肢からの複数選択と自由記述で回答してもらったところ「入所者・児の反応に合わせ、臨機応変に対応できるか」が最



も多く 108 名 (73.5%)、次いで「入所者・児とうまくかわれるか」104 名 (70.7%)、「入所者・児の状況に合った対応ができるか」100 名 (68.0%)、「施設職員とうまくコミュニケーションが取れるか」86 名 (58.5%)、「入所者・児に自分から積極的にかかわれるか」81 名 (55.1%)、「実習記録を正しく書き毎日提出できるか」73 名 (49.7%)、「自分との関りを通して入所者・児が楽しんで活動してくれるか」57 名 (38.8%)、「入所者・児の名前が覚えられるか」53 名 (36.1%)、「不安はない」3 名 (2.0%) であった (figure.3)。

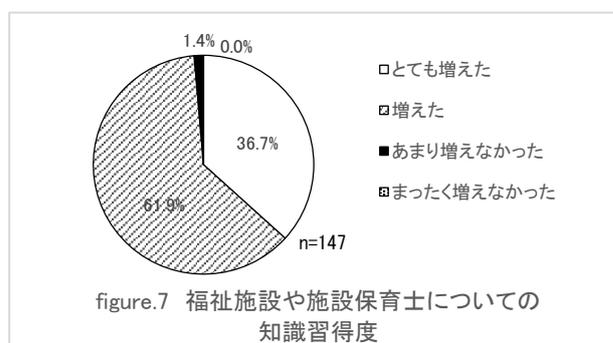
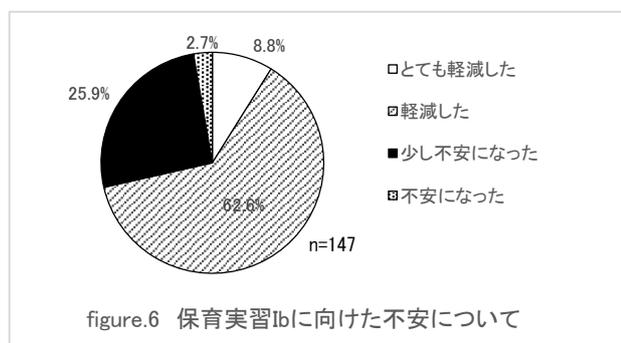
自由記述では、3 名の回答者があり、それぞれ「授業で学んだことを併用した保育支援が実践できるか」「精神的に不安になって実習を続けられるかどうか」「まだ正直、怖いという印象をもってしまう」という回答があった。



施設実習に設定している実習先の種別ごとの「利用者像や支援のありかたの理解度」について、「とてもよく理解できた」と回答した学生が最も多く 79 名 (53.7%)、「理解できた」66 名 (44.9%)、「あまり理解できなかった」1 名 (0.7%)、「まったく理解できなかった」1 名 (0.7%) であった (figure.4)。

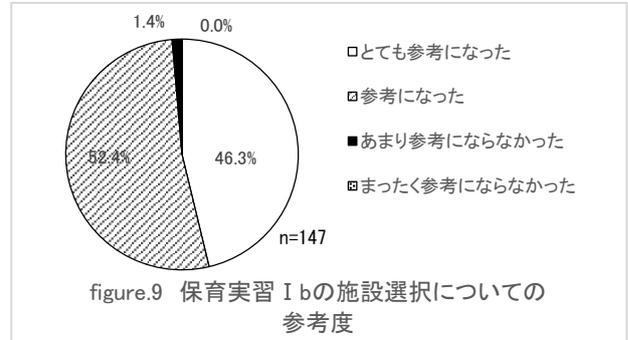
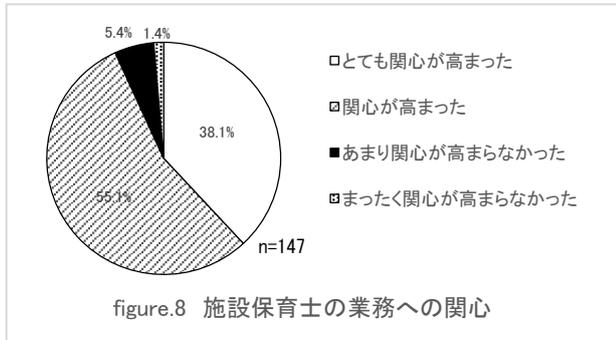
「施設実習に向けた意欲」について、「とても高まった」と回答した学生が最も多く 81 名 (55.1%)、「高まった」62 名 (42.2%)、「少し低減した」4 名 (2.7%) であった (figure.5)。

施設実習に向けた不安について「軽減した」と回答した学生が最も多く 92 名 (62.6%)、次いで「少し不安になった」38 名 (25.9%)、「とても軽減した」13 名 (8.8%)、「不安になった」4 名 (2.7%) であった (figure.6)。

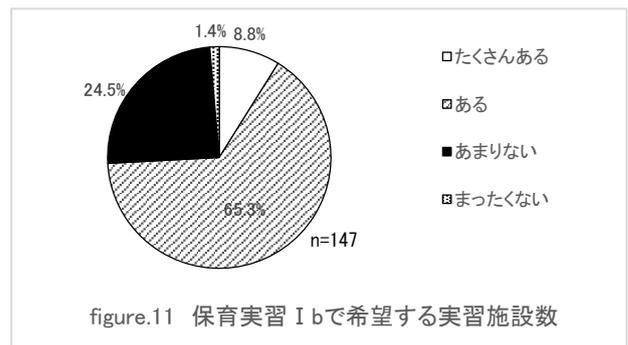
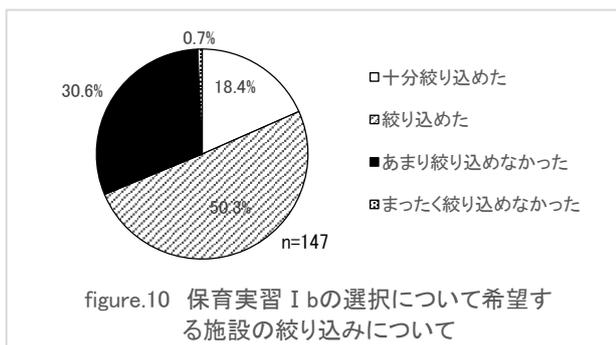


施設実習の実習先となる「福祉施設や施設保育士についての知識習得度」については、「増えた」と回答した学生が最も多く 91 名 (61.9%)、次いで「とても増えた」54 名 (36.7%)、「あまり増えなかった」2 名 (1.4%) であった (figure.7)。

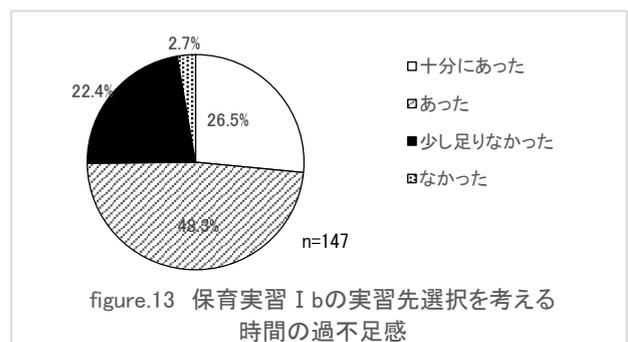
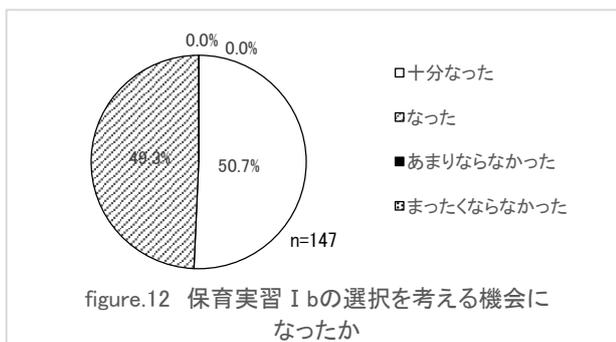
障がい児施設をはじめとする福祉施設に勤務する「施設保育士の業務への関心」について、「関心が高まった」と回答した学生が最も多く 81 名 (55.1%)、「とても関心が高まった」56 名 (38.1%)、「あまり関心が高まらなかった」8 名 (5.4%)、「まったく関心が高まらなかった」2 名 (1.4%) であった (figure.8)。



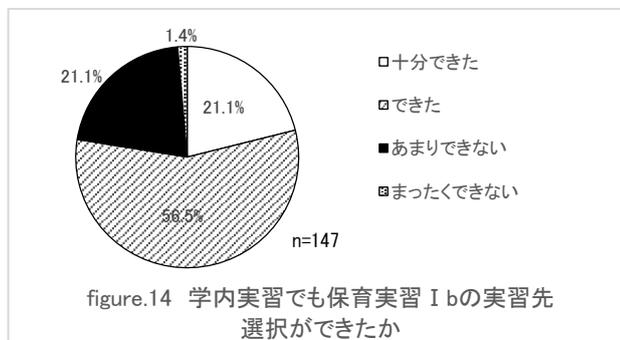
施設実習の実習先の「施設選択についての参考度」について、「参考になった」と回答した学生が最も多く 77 名 (52.4%)、「とても参考になった」68 名 (46.3%)、「あまり参考にならなかった」2 名 (1.4%) であった (figure.9)。



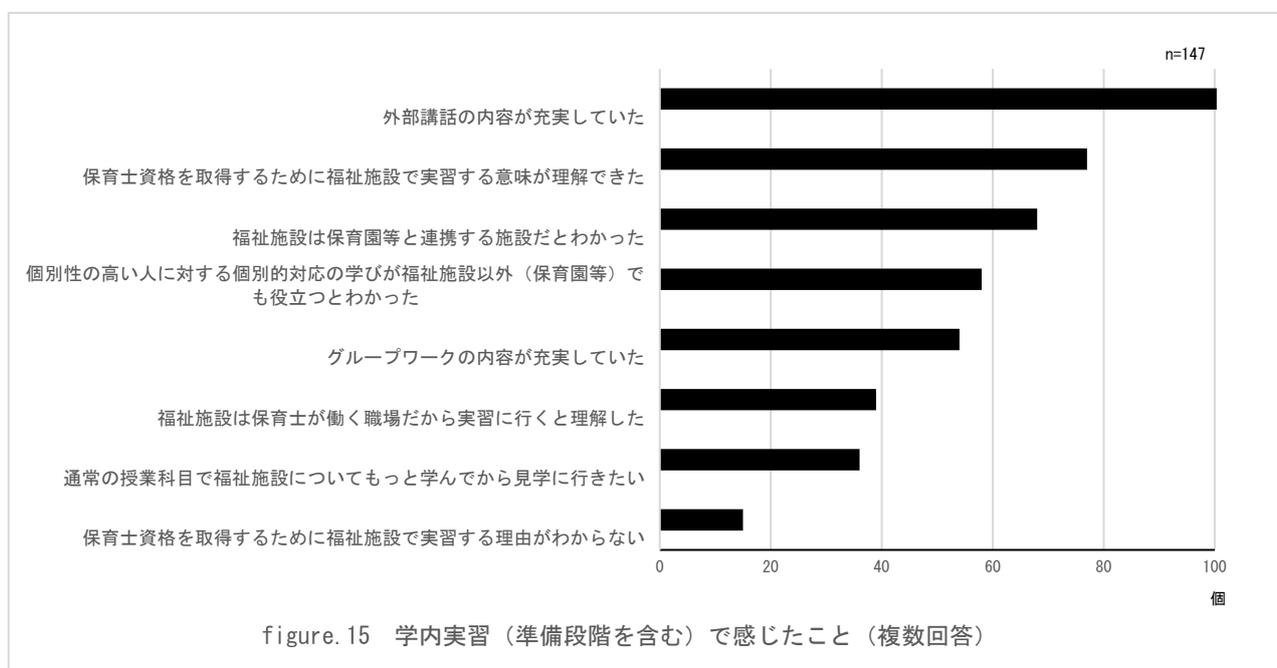
また、「希望する施設の絞り込み」について、「絞り込めた」学生が最も多く 74 名 (50.3%)、次いで、「あまり絞り込めなかった」45 名 (30.6%)、「十分絞り込めた」27 名 (18.4%)、「まったく絞り込めなかった」1 名 (0.7%) であった (figure.10)。施設実習の実習先として「希望する実習施設」が「ある」と回答した学生が最も多く 96 名 (65.3%)、「あまりない」36 名 (24.5%)、「たくさんある」13 名 (8.8%)、「まったくない」2 名 (1.4%) であった (figure.11)。



今回の学内実習が、「実習先施設の選択を考える機会になったか」では、「十分なった」と回答した学生が最も多く 72 名 (50.7%)、次いで「なった」70 名 (49.3%) であった (figure.12)。また、その「実習先選択を考える時間」について、時間が「あった」71 名 (48.3%)、「十分にあった」39 名 (26.5%)、「少し足りなかった」33 名 (22.4%)、「なかった」4 名 (2.7%) であった (figure.13)。



実際に施設に見学実習へ行かずに「学内での見学実習ではあったが、施設実習の実習先選択はできたか」については、「できた」と回答した学生が最も多く 83 名 (56.5%)、「十分できた」31 名 (21.1%)、「あまりできない」31 名 (21.1%)、「まったくできない」2 名 (1.4%) であった (figure.14)。



今回の「施設見学学内実習の準備段階から全体を通して感じたこと」を 8 の選択肢からの複数選択と自由記述で回答してもらったところ、最も多い回答が「外部講師の内容が充実していた」101 名 (68.7%)、次いで「保育士資格を取得するために福祉施設で実習する意味が理解できた」77 名 (52.4%)、「福祉施設は保育園等と連携する施設だとわかった」68 名 (46.3%)、「個別性の高い人に対する個別的対応の学びが福祉施設以外 (保育園等) でも役立つとわかった」58 名 (39.5%)、「グループワークの内容が充実していた」54 名 (36.7%)、「福祉施設は保育士が働く職場だから実習に行く と理解した」39 名 (26.5%)、「通常の授業科目で福祉施設についてもっと学んでから見学に行きたい」36 名 (24.5%)、「保育士資格を取得するために福祉施設で実習する理由がわからない」15 名 (10.2%) で、自由記述では 1 名の学生が「保育士資格の大切さを実感した」と回答した (figure.15)。

4. 考察

新型コロナウイルス感染症の影響により施設見学実習が学内実施での代替となったが、全体の9割以上の学生が、急な変更となったものの実際に施設に出向いて見学をしたかのような学びが得られたと感じていた。これは、コロナ禍という条件を除いても、実施内容の構成次第では、施設での見学ではなくともM短期大学保育科の実習の手引きに記載された施設見学実習の目的である、施設保育士としての職務を知ることによって保育士としての学びの視野を広げることや、福祉施設の現状を理解し夏季休業期間以降の体験実習・ボランティア活動に繋げることが可能であることを示唆している。また、学内実施だからと言って学生の意欲が低下するということではなく、むしろ9割以上とほとんどの学生が真剣に取り組むことができたと回答した。大谷ら（2012）によると、保育者に必要な資質について、保育者養成課程の学生は、人間性が重要であり保育技術の必要性を感じているものの、向上心が必要であるとは感じておらず、日頃から学びを積み上げる向上心の少ない学生もいるとしている。また、一方で、学生が重要であることの項目として上位にあげなかった向上心について、現役保育者は保育経験を積んでも向上心を持ち学び続けることが重要であると捉えているとしている。本調査において向上心についての質問項目はないが、取り組みについては前述のとおりほとんどの学生が真剣に取り組んでおり、現役保育者が重要であると感じている学びへの姿勢を、M短期大学保育科の学生も同様に重要と感じることができたのではないであろうか。その要因として、施設見学年内実習前指導において、学内実施であってもよりリアリティある学びとするため、招聘講師の講話等で知り得た個人情報保護についての誓約や日誌について、学外実習と同様に取り扱うものとして指導したことで、学生が緊張感を持ち真剣に取り組むことに繋がったと推測される。

2年次に実施する施設実習に対して1年次学生が感じる不安として、入所者・児への対応や関り、施設職員とのコミュニケーションといったものを半数以上の学生が感じており、一方で不安を感じていない学生は全体のわずか2.0%にとどまっていることが明らかになった。野田ら（2014）は、保育士養成校における施設実習を、「保育士を保育所で就職するための基礎資格とした意識で養成校へ入学してきた学生の立場からすると、施設実習は相当なストレスやプレッシャーを伴う実習」であり、実習先施設の「多様性」という実習環境特性が学生にとっては、明確な施設理解と実習意義の理解ができずに不安を抱えた状態で実習初日を迎えることが少なくない」と述べている。本調査においても、施設実習へ何らかの不安を感じる学生が全体の98.0%を占めており、保育士養成校で学ぶ多くの学生にとって、保育所以外の児童福祉施設で行う実習に対する不安が課題となっていることが明らかになった。この不安感を軽減させるためには施設理解と実習意義の理解が重要となってくるが、今回の学内実習において2年次の施設実習で出向く実習先の種別ごとの利用者像や支援のありかた、あるいはそれらの施設及び施設に勤務する保育士に関する知識や、施設保育士の業務への関心が、いずれも9割以上の学生で高まったことが明らかになった。それと同時に、2年次の施設実習に向けた不安が軽減したと感じる学生が7割以上となり、また、施設実習に向けて意欲が高まったと感じた学生は9割以上いることが明らかになった。小佐々ら（2018）は、「保育士養成校への進学を希望する高校生の進学希望理由から、保育士は小さい子どもへの支援に特化した専門資格であると考えていることが予測される」とし、そのような学生が保育所以外の社会福祉施設が対応する「児童や障害者と初めて接する場合、施設実習に対する大学生の不安は大きいと推測する」と述べている。また、貴田ら（2012）によると保育士養成課程における施設実習について、実習前に実習への不安感が低い学生のほうが実習の成果の自己評価が高

く、期待感が高い学生のほうが実習後に現場での体験の自己評価が高かったため、事前指導において実習への学生の不安感を低減させ、期待感を高めるような指導の工夫が必要としている。やはり、施設実習の準備段階のひとつとして、施設での見学実習あるいは学内実習を通して、施設保育士の職務内容や施設の現状を理解することは重要で、それにより多くの学生が施設実習に対して感じていた不安感を可能な限り軽減させ、意欲的に実習に臨みより質の高い実習やその成果が得られることに繋がると考える。

今回の学内実習を経験したすべての学生にとって、2年次における施設実習の実習先の施設選択を考える機会になっており、自身が希望する実習先について、98.7%とほとんどの学生が学内実習での経験が選択の参考になったと回答している。また、8割近い学生が実際に施設に出向かなくとも学内での見学実習で施設実習の実習先選択ができたと感じており、7割弱の学生が保育実習実施基準に基づいて定められた実習先から希望施設を選定することができ、実習先について7割以上の学生が希望する施設があると回答している。実習前指導やこれまでの実習指導の授業から学内実習当日に至るまで、様々な施設見学実習に関する指導を行ってきたが、本調査から多くの学生が、施設の実習指導担当職員による講話や、保育士養成課程における施設実習の実習意義、施設保育士の業務への理解が得られたことも明らかになった。このことから、今年度は新型コロナウイルス感染症による影響で、施設で実際に見学実習ができず代替として学内実施となったが、学内実習でも十分にその経験をより具体的な施設実習での自身の学びへの意欲やイメージに繋げることが可能であり、早期からの実習に向けた学習等の事前準備や心構えに繋がるのではないかと考えられる。これまでM短期大学では、1年次の6月に施設見学実習を実施していた。しかし、保育所以外での就業を想定せずに、小さい子どもへの支援のみを保育士のイメージとして入学してきた学生に対し、比較的入学してすぐの専門知識の修得も深まっていない時期に、実際に施設に出向くのは描いていた保育士イメージとの乖離から、ともすると不安感の増大を招く恐れがある。これらのことから、施設実習に向けた見学実習のありかたとして、学内であっても施設を理解できるような指導内容の構成を工夫すれば、学内実習という形式であっても見学実習と同等の効果を得られ、学生が意欲的に施設実習に臨み、より多くの実習成果を得ることが可能であることが示唆された。今後は、施設見学実習についての時期や実際に施設に出向く必要性を再考し、保育士養成課程必修科目のうち施設実習に大きく関わる教科目「社会福祉論」や「社会的養護Ⅰ」の学習理解が進んだ1年次後期に学内において、施設から招聘した職員による視覚教材を用いた施設状況を理解するための講話や、様々な福祉施設の利用者像やそこで働く保育士の利用者支援への理解等について、講義やグループワークを用いた学内での見学実習を基本とした実施への転換を検討したい。

本研究では、施設見学学内実習での経験についてのみ学生の意識を分析した。今後の課題として、学内実習を経験した学生と実際に施設に出向いて見学実習を行った学生それぞれに、その後経験した施設実習についても意識を調査し、施設実習のありかたを検討しながら比較分析を行い、より学生の施設実習ニーズに沿った実習指導教育を構築していきたい。

謝 辞

調査にこころよくご協力くださいました対象者の保育者養成校の学生の皆様に感謝いたします。

利益相反

利益相反に相当する事項はない。

引用文献

- (1) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局長（2015）「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」〔（別紙2）保育実習実施基準〕雇児発 0331 第 29 号
- (2) 宮崎学園短期大学保育科（2022）「**令和 4（2022）年度 入学生** 実習の手引き【保育実習】【教育実習】」p. 9
- (3) 宮崎学園短期大学実習指導課（2022）「令和 4 年度実習計画（1 年生）前期」p.3
- (4) 厚生労働省子ども家庭局保育課（2020）「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う指定保育士養成施設の対応について」<https://www.mhlw.go.jp/content/11920000/000640105.pdf>、最終閲覧日 2022/2/25
- (5) 大谷彰子，平化恵美子（2012）「保育者養成課程における実習に対する課題と不安の変容」甲子園短期大学紀要，第 30 巻，pp. 67-73
- (6) 野田敦史，上田征三（2014）「施設実習における現場職員ニーズと学生ニーズ」未来の保育と教育－東京未来大学実習サポートセンター紀要－，創刊号，pp. 9-18
- (7) 小佐々典靖，城戸裕子，鈴木靖之（2018）「保育士養成校における施設実習に対する不安と変化」浜松学院大学教職センター紀要，第 7 号，pp. 39-52
- (8) 貴田美鈴，谷口篤（2012）「保育実習（施設）の事前指導と実習後の学生の意識－実習の期待感と不安感、及び実習成果の自己評価－」岡崎女子短期大学研究紀要，第 45 号，pp. 21-28